

酔っぱらい星

小川未明

青空文庫

佐吉が寝ていると、高窓の破れから、ちらちらと星の光がさしこみます。それは、青いガラスのようにさえた冬の空に輝いているのであります。

仰向けになつて、じつとその星を見つめていきますと、それが福々しいおじいさんの顔になつて見えました。おじいさんは、頭に三角帽子をかぶっています。そして、やさしい、まるまるとした顔をして、こちらを見て笑っています。佐吉には、どうもこのおじいさんが、はじめに見た顔でないような気がするのであります。

「どこで、このおじいさんを見たらう。」と、佐吉は考えながら、星を見上げていきますと、さまざまの幻が目に映つてくるのであります。

去年の暮れのことでありました。佐吉が独り町を歩いていきますと、いつもは寂しい町でありましたけれど、なにしろ年の暮れのことですから、人々が急がしように道にあるいていました。また、商店は、すこしでもよけいに品物売ろうと思つて、店先をきれいに飾つて、いたるところで景気をつけていました。

佐吉は、それらの有り様をながめながら歩いていきますうちに、ある教会堂の前にさしかかったのです。ちょうどその日は、クリスマスのお祭りでありましたので、その教

会堂かいどうの中なかにはぎやかでありました。ここばかりは、平生へいぜいからだれがはいってもいいと聞いていましたので、佐吉さきちは、おそろおそろ入り口いぐちまで近寄ちかよつてその内なかをのぞいてみますと、そこには、子供こどもや、大人おとながおおぜい集あつまっています。いい音色ねいろのする音楽おんがくにつれて、みんなは楽したのしそうに唄うたをうたっています。そして、一本ほんの脊せいの高い常磐木ときわぎを中ちゆう央おうに立たてかけて、それには、金紙きんがみや、銀紙ぎんがみが結びむすつけてあり、また、いろいろの紅あかや、紫むらさきのおもちやや、珍めづらしい果物くだものなどがぶらさがっていました。

また、そのそばには、大きな袋おほふくろを下さげた、おじいさんの人形にんぎようが立たっていました。そのおじいさんは、どこからか雪ゆきの中なかをさまよってきたものと見みえて、わらぐつをはいていました。そして、脊中せなかには、真綿まわたの白しろい雪ゆきがかかっています。なんでもおじいさんは、灰色はいいろのはてしない野原のほらの方ほうから、宝物たからものを持もつてやってきて、この町まちの子供こどもらを喜よろこばせようとするのでありました。佐吉さきちは、そのとき、そのやさしそうな、おじいさんの顔かおをなつかしげに見みたのですが、どこか、星ほしの中なかにいるおじいさんの顔かおが、それに似にているようでありました。

また、これはあるときのこと、春はるであったと思おもいます。佐吉さきちは、一人家ひとりいえの外そとに遊あそんでいました。佐吉さきちの家いえは貧乏びんぼうでありましたから、ほかの子このように欲ほしい笛ふえや、らっぱや、

汽車きしやなどのおもちやを買かつてもらうことができなかつたのです。

それで、ぼんやりとして路みちの上うえに立たつていますと、あちらから、いい小鳥ことりのなき声こゑが聞きこえたのです。圃はたけには、花はなが咲さいていましたから、その花はなを訪たずねて、山やまから小鳥ことりが飛とんできたのだらうと思おもつて、いいなき声こゑのする方ほうを見向みむきますと、おじいさんが、たくさんの鳥とりかごをさおの両りょうほう方かたにぶらさげて、それをかついでこちらにやってきたのであります。佐吉さきちは、そのそばに駈かけ寄よつてみますと、かごの中なかには、名なも知らないような小鳥ことりがはいつていて、それがいい声こゑでなっていました。

佐吉さきちは、笛ふえや、らっぱや、汽車きしやや、そんなようなおもちゃなどはいらぬから、どうかして、その小鳥ことりが一羽わほしいものだと思おもつて、そのおじいさんの後あとについていきました。いつまでも後あとについてくるので、おじいさんは、立たち止どまって振ふり向むきました。

「坊ぼろは、そんなに鳥とりがほしいのか。」といつて、おじいさんは笑わらいました。

佐吉さきちは、目めを輝かがやかして、黙だまつてうなずきました。すると、おじいさんは、肩かたからかごを下したにおろして、腰こしからたばこ入いれを取とり、きせるを抜ぬいて、すばすばとたばこを喫すいはじめました。

「坊ぼろが、そんなにほしいなら、一羽わやろうかな。」と、おじいさんはいいました。

佐吉さきちの小さな心臓しんぞうはふるえました。耳みみたぶがほてって夢ゆめではないかと思おもいました。おじいさんは、どれでもほしい鳥とりをやるといいましたので、くびまわりの赤あかい、かわいらしいうそがほしいと答こたえました。

そのおじいさんは、ほんとうにいいおじいさんでありました。その鳥とりをかごから出だして、佐吉さきちにくれました。佐吉さきちは、天てんにも飛び上あがるような気持きもちちで家うちへ持もって帰かえりました。そしてかごの中なかに入れて、大だい事に飼かったのであります。うそはすぐそのかごに馴なれて、毎まい日にち戸口とぐちの柱はしらに懸かけられて、そこでいい声こえを出だしてさえずっていました。佐吉さきちは、このうえなく、うそをかわいがりしました。

佐吉さきちのお母かあさんは、やさしいお母かあさんでありましたが、ふとした病びょう気きにかかりました。佐吉さきちは、夜よる昼ひるしんせつにお母かあさんの看かん病びょうをいたしました。けれど、お母かあさんの病びょう気きは、いつなおるようすもなく、だんだん悪わるくなるばかりでしたから、どんなに佐吉さきちは心しん配ぱいしたかしれません。しかし、そのかいもなく、お母かあさんは死しんでしまわれました。佐吉さきちは悲かなしみました。しかもその間あいだに、うそに餌えさをやることを忘わすれていましたので、あれほどまでにかわいがっていたうそまで、また、いつのまにか死しんでしまいました。

お母かあさんに別わかれ、うそが死しんでからというものは、佐吉さきちは、さびしい日ひを送おくりました。

お父さんは、正直ない人でしたけれど、なにしろ家が貧しかったので、佐吉に、思うように勉強をさせたり、佐吉の欲しいものを買ってくださることもできませんでした。お父さんは朝、仕事に出て、日が暮れると帰ってきました。いままでは、日が暮れるからのお使いは、たいていお母さんがしましたが、お母さんの死後は、佐吉がしなければなりませんでした。

「佐吉や、お酒を買ってきてくれ。」と、お父さんにいわれると、佐吉は町まで酒を買いにいかなければなりませんでした。そして、まったく夜になって、床の中に入りますと、いつも高窓から一つ星の光がもれてさすのでありました。それを見つめていますと、それが星でなくて、やさしいおじいさんの顔になって目に映るのであります。その顔が、佐吉にうそをくれたおじいさんの顔のように思われたのであります。

佐吉は、夜ごと、その星をながめて空想にふけりました。そこで、そのうち手足の寒いのも忘れて、いつしか快い眠りに入るのがつねでありました。

ある冬の、木枯らしの吹きすさむ晩のことでありました。

「佐吉や、お酒を買いにいつてこい。」と、お父さんはいいました。佐吉は、びんを握って出かけました。雪が、凍っていました。空は青黒くさえて、星の光が飛ぶように輝い

ていました。雪路を寒さに震えながら町までいって酒を買って、佐吉は、また、路をもどってまいりました。

広い野原はしんとして、だれ一人通るものもなかったのです。黒い常磐木の森が向こうに黙って浮きでています。風が中空をかすめて、両方の耳が切れるように寒かったのであります。

このとき、不意に前に立ちふさがったものがありました。佐吉は驚いて見上げますと、おじいさんがにこにこ笑っていました。佐吉は、なんとなく、見覚えのあるおじいさんのように思いましたので、じつとその顔を見上げていますと、

「あ、寒い、寒い。酒を飲ましておくれ。」と、おじいさんはいいました。

佐吉は、びんを隠すようにして、「これはお父さんのところへ持っていかなければならぬのだから、おじいさんにあげることはできない。お父さんが、家で待っているのだから。」と、答えました。

「たまには、お父さんは我慢するがいい。今夜は、あまり寒くて、私はとてもやりきれない。毎晩、おまえの安らかに眠るように見守っているが、たまらなくなつて降りてきたのだ。」と、おじいさんはいいました。

そういわれると、なるほど、毎晩、寝ていて見る空のお星さまでありました。そして、はじめに気がつくと、おじいさんは、頭に三角の帽子をかぶっていました。

佐吉が、どうしたらいいものだろうと、あつけにとられていきますと、おじいさんは、彼の手から酒びんを奪って、トクトクとびんの口から、音をさせて自分の口に酒をうつして、さもうまそうにすっかり飲み干してしまいました。

「あ、これでやつといい気持ちになった。もうどんなに風が吹いても寒くない。」と、独り言をいいながら、脊の低いおじいさんは、よちよちと凍った雪の上を歩きはじめました。佐吉は、お父さんにしかられはしないかと、心配しながら家に帰ってきました。そして、おじいさんに酒を飲まれてしまったことを、父に話しますと、はたして、父は、佐吉をばかだといつてしかりました。

「おまえは、きつねにだまされたのだろう。それでなければ、転んで酒をこぼしてしまつたにちがいない。」と、父はいつて、佐吉の話を信じませんでした。

それからまもなく、佐吉は床の中にはいりました。そして、いつものように高窓の破れから空を仰ぎますと、不思議にも、ちようど、三角な帽子を頭にかぶったおじいさんが、よちよちと転びそうに、大空を上つてゆくのでありました。

霜しもが降ふるかと思みえて、空そらは光ひかつています。そして星明ほしあかりに青黒あおぐろいガラスのようになつた空そらは、すみからすみまでふき清きよめられたごとく、下界げかいの黒くろい木立こだちの影かげも映うつるばかりであります。

おじいさんは、一寸すんぽうし法師ほうしのようになつて、だんだん高たかく、高たかく、目めに見みえないなわをたぐつて上のぼりましたが、酒さけに酔よつていますので、右みぎに転ころげ、左ひだりに転ころげそうにしていました。ふと、その拍ひょうし子あたまに頭のに載のせていた三角かくの帽ぼうし子ぼうしがおつこちました。帽ぼうし子ぼうしは、きらきらと小ちひさな火ひの子このようになつて下したに落おちてきました。はつと思おもつて佐吉さきちは、すぐになつて床とこから起おき上あがろうと思おもいましたが、また、明日あしたいつてみようと思おもいなおして、そのまま眠ねむつてしまつたのであります。

夜よが明あけてから、佐吉さきちは、父親ちちおやといつしよになつて、昨夜ゆうべおじいさんになつた野原のほらへいつてみました。すると、ちようどおじいさんの帽ぼうし子ぼうしの落おちたあたりに、銀色ぎんいろに光ひかつた三角かくの小ちひさな石いしが一つ、真まつ白しろな雪ゆきの上うえになつて落おちていました。

「これは珍めづらしい石いしだ。」と、父親ちちおやはいいました。二人ふたりは、その石いしを拾ひろつて家いえに歸かえりました。が、しばらくたつてから、その石いしを、大金たいきんを出だして買かつた人ひとがなつたので、貧びんぼ乏うな親おや子こは、急きゆうに幸こう福ふくな生せい活かつを送おくつたといふことになつてあります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「赤い鳥」

1920（大正9）年1月

※表題は底本では、「酔《よ》っぱらい星《ぼし》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年11月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

酔っぱらい星

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>